

# “是～的”構文における“VO的”と“V的O”の一考察

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

金 萍

## 要旨

中国語の“是～的”構文には、二種類の形式“是VO的”文と“是V的O”文がある。両形式は、同じ意味でありながら異なる機能をもつ場合もある。そこで本稿では、“是VO的”と“是V的O”の異同を明らかにするために、「主語と述語の意味関係」と「叙述の焦点」という二つの視点から考察した。先行研究を踏まえて、考察した結果は次の通りである。(1)「主語と述語の意味関係」の視点：“是”の前後の成分を「同一関係」に注目し考察してみると、“是VO的”文は主に「主語部」の動作主について語る陳述文であり、“是V的O”文は主に「述語部」の出来事について語る陳述文である。(2)「叙述の焦点」の視点：否定や疑問の形式で“是VO的”文と“是V的O”文の叙述の焦点を検証してみると、“是VO的”文の叙述の焦点は出来事を表す述語部全般であり、“是V的O”文の叙述の焦点は動作行為である。

## キーワード

主語と述語の意味関係, 叙述の焦点

## A Comparative Analysis of Two Chinese Sentence Structures shi(是) + Verb + Object + de(的), and shi(是) + Verb + de(的) + Object

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

JIN Ping

## Abstract

In Chinese, there exist two types of sentence structures, A) shi (是) + Verb + Object + de(的), shortened as “shi VO de” and B) shi(是) + Verb + de(的) + Object, shortened as “shi V de O”. In the following, they will be referred to as Type A and Type B, respectively. In some occasions, these two structures express the same meaning, but they have contain completely different syntactic functions. In this paper, we will discuss these structures similarities and differences in terms of their subject-predicate relationship and their narrative focus, which is summarized as the following. 1) the relationship between the subject and predicate. If the two parts before and after the shi(是) are transformed into identical relationship, we will find that Type A is a narrative sentence, mainly describing the agent of the sentence subject, while Type B is a narrative sentence, mainly describing the event of the predicate part. 2) the focus of narration. Based on the verification of the negative and interrogative forms of the two structures, we find that the sentence structure Type A focuses on the whole predicate part of the sentence, while the Type B emphasizes the actual action of the verb.

## Keywords

the relationship between the subject and predicate; the focus of narration

## 0. はじめに

現代中国語の学校文法で“強調構文”と呼ばれるものには、“是VO的”と“是V的O”の二つがある。以下の例は、杉村(1983:478)で挙げられたものである。

- (1) 他 是 在 北 大 学 哲 学 的。  
 彼 で 北京大學 学 ぶ 哲学  
 (彼は北京大学で哲学を学んでいるのだ。)
- (2) 他 是 在 北 大 学 的 哲学。  
 彼 で 北京大學 学 ぶ 哲学  
 (彼は北京大学で哲学を学んだのだ。)

杉村は、「例文(2)は已然のアスペクトを示す文であるが、例文(1)は北京大学の在学生を紹介する文とも読める」のように主張している。<sup>1)</sup>しかし、両構文は異なる意味を表す場合もありながら、時間を表す名詞を加えると、同じ意味を表出することも一方で可能である。

- (3) 他 是 去 年 在 北 大 学 哲 学 的。  
 彼 去 年 で 北京大學 学 ぶ 哲学  
 (彼は去年北京大学で哲学を学んでいたのだ。)
- (4) 他 是 去 年 在 北 大 学 的 哲学。  
 彼 去 年 で 北京大學 学 ぶ 哲学  
 (彼は去年北京大学で哲学を学んでいたのだ。)

「VO的」の語順を用いた例(3)と「V的O」の語順を用いた例(4)は、「去年」という「過去の一時点」を表す時間詞との共起によって、ともに過去で起こった個別の事態に言及しており、表す意味も同じである。<sup>2)</sup>

ところで、同じ機能を果たす場合があると言っても、形式が異なるのであるから、どこか異なった機能を果たしているはずである。そのため、本

稿では「主語と述語の意味関係」と「叙述の焦点」二つの視点から“是VO的”と“是V的O”の異同を考察する。

## 1. 「主語と述語の意味関係」の視点から

### 1.1 先行研究

牧野(1996:36-42)は“是VO的”と“是V的O”の違いを認知論的角度から解明しようとした論文である。同論文は本論考の“是VO的”を<N是~的>、“是V的O”を“是~的”と表記している。<sup>3)</sup>

牧野は、両構文の意味構造について、<N是~的>も“是~的”句もともに“是”字句のカテゴリに属するものであり、賓語の性格がちがうためにそれぞれ異なった意味をもつのであると主張した。その上で、<N是~的>が述部による主語の特徴づけを表し、“是~的”が動作に関する状況に最大の際だちを与えるとしている。以下は、それをまとめたものである。<sup>4)</sup>

<N是~的>について、牧野は、<N是~的>を“是”字句と考えれば、<~的>は主語と同一関係にある名詞句であると述べる。また、“是”字句の成立に関して、「特徴づけ」の概念が重要な役割を果たすという。例えば、「我是日本老婆，他也是日本老婆」(私の妻は日本人妻だ、彼の妻も日本人妻だ。)の例文では、「我」と「他」は「私の妻」と「彼の妻」を指しているのに対して、\*(11) '我是女的老婆，他也是女的老婆。(私の妻は女の妻だ、彼の妻も女の妻だ。)'の例文が不自然なのは、主語と換喩的關係にある別のものが賓語によって特徴づけられていないからであると述べる。

一方、“是~的”について、牧野は以下のように述べる。<sup>5)</sup>

一般に＜主語“是”賓語＞は、主語と賓語の意味関係によって、「同一」の関係にある「他是内科医生（彼は内科の先生だ。）」のような例文のほか、「同一」関係になく、文脈によって決まる「我是炸酱面」（私はジャジャン麺だ。）のような例文がある。その“是”が「同一」の関係にない主語と賓語を結びつけることができるのは、「換喩（metonymy）」—あるものをそれに関係のある他のもので代表させて表す—が関与しているからであると考えることができる。例えば、「我是炸酱面」の“我”（私）は“我的菜”（私のおかず）を指している。同様に、“是～的”句を“是”字句だと考えると、例えば「我是在北京上的大学」（私は北京で大学に通っていた）は、「我是大学」（私は大学だ）ということになってしまうが、この文が成立しているのも、主語「我（私）」と「私の大学」（私の大学）との間に「換喩的關係」が成り立っているである。つまり、“是～的”句と“是”字句は「換喩」という共通点がある。

さて、“是～的”句を“是”字句と考えれば、それは＜～V的N＞という偏正構造の名詞句を賓語とする“是”字句ということになる。牧野（1996：40）は、“是～的”句と偏正構造の名詞句＜～V的N＞を賓語とする“是”字句の意味構造の共通点を三つ挙げている。

①「動作に関する状況に最大の際立ちを与える」

という意味構造を持つ。

(a) 我 是 在 法国 画 的 画儿。  
私 で フランス 描く 絵  
(私はフランスで絵を描いたのだ。)

(b) 那 是 在 法国 画 的 画儿。  
あれ で フランス～描く 絵  
(あれはフランスで描いた絵だ。)

②否定文で否定されるのは、「動作に関する状況」のみで、動作自体は否定されない。

(a) 我 不 是 在 法国 画 的 画儿。  
私 で フランス 描く 絵  
(私はフランスで絵を描いたじゃない。)

(b) 那 不 是 在 法国 画 的 画儿。  
あれ で フランス 描く 絵  
(あれはフランスで描いた絵じゃない。)

③動作は「已然」と解釈される。

(a) 我是在法国画的画儿。  
(私はフランスで絵を描いた。)

(b) 那是在法国画的画儿。  
(あれはフランスで描いた絵だ。)

以上のように、牧野（1996）は、“是VO的”と“是V的O”それぞれの意味構造が生まれる統語的な理由を「“是”前後の成分を換喩的關係で同一關係を持たせる」という観点と「偏正構造の名詞句＜～V的N＞を賓語とする“是”字句」という観点によって両構文を解釈した。そこで、本節では、牧野（1996）の観点を参考に、“是VO的”と“是V的O”構文において、“是”の前後の成分はどのような關係を保っているのか、その意味關係を解明することに重点を置くことにする。

## 1.2 主語と「“VO的”，“V的O”」との意味關係

本節では、主語と両構文の意味關係について、すなわち、両構文の意味の差について確認しておきたい。そのため、“是”の後ろの成分に何か隠れた要素が含まれているという仮説を立てる。ここで、本文の最初で挙げた例文をもう一度挙げておく。

(3) 他 是 去年 在 北大学 哲学 的。  
彼 去年 で 北京大学 学ぶ 哲学  
(彼は去年北京大学で哲学を学んでいたのだ。)

(4) 他 是 去年 在 北大学 的 哲学。  
彼 去年 で 北京大学 学ぶ 哲学  
(彼は去年北京大学で哲学を学んでいたのだ。)

例文(3)は牧野（1996）の“是字句”における“是”の前後の成分「同一關係」の観点から考えると、「他=在北大学哲学的」という文になる。主語の「他」と「北京大学で哲学を学んでいる」を「同一關係」にさせるためには、文末に「人」を加

えなければならない。

- (3') 他 是 去 年 在 北 大 学 哲 学 的 (人)。  
 彼 去 年 で 北 京 大 学 学 ぶ 哲 学 (人)  
 (彼は去年北京大学で哲学を学んだ人だ。)

そうすると、動詞・目的語連語である「学哲学」は「人」に対する修飾成分となる。逆の方向から考えてみれば、(3') が「人」を省略しても、「彼は去年北京大学で哲学を学んでいたのだ。」という意味を表せる。つまり、前に出たものの重複をさけるため、例(3') にはもともと省略されている「人」の意味が含まれており、そして主語である「他」を中心に、「他」が行った動作行為に関するすべての状況(時間・場所など)を説明するという表現であると考えられる。

一方、例文(4)は牧野(1996)の「偏正構造の名詞句<～V的N>を賓語とする“是字句”」の観点で考えると、「彼は去年北京大学で学んだ哲学だ」というふうに解釈できる。一見「他=哲学」(彼=哲学)というような非論理的な文になるが、牧野氏は主語の「他」と「北京大学で学んだ哲学」との間に、「他=他的哲学」のような「換喩的關係」で文が成り立っているとする。つまり、主語が代表しているものは「彼の哲学」になる。しかし、このように考えると、例文(3)「彼=北京大学で哲学を学んでいた人」で、例文(4)は「彼の哲学=北京大学で学んだ哲学」という意味解釈になる。そうすると、本文の問題提起である「例文(3)と例文(4)は同じ意味を表出できる」という本来の趣旨からずれてしまう。そこで、筆者は例文(4)を例文(3)と同じように、「是」の前後の成分を「同一関係」にさせるために、文末に「人」を加えてみた。

- (4') 他 是 去 年 在 北 大 学 的 哲 学 (的人)。  
 彼 去 年 で 北 京 大 学 学 ぶ 哲 学 (～の人)  
 (彼は去年北京大学で哲学を学んだ人だ。)

例文(3') と同じ原理で、例文(4') にはもともと

省略されている「人」の意味が含まれている。そして、例文(3') の文末成分「学哲学的人」と比較してみると、例文(4') の文末成分「学的哲学的人」は、動詞「学」の後ろに「的」がくっ付いているため、「過去」の意味<sup>6)</sup>を表せると見られる。従って、例文(4') は主語である「他」によって既に行われた動作行為を中心に、その動作行為に関するいずれかの状況(時間・場所など)を説明するという表現であると考えられる。

以上で牧野(1996)で述べられた「同一関係」の観点をを用いて、「是VO的」と「是V的O」における主語と述語の関係を考察した。例文(3') と(4') をみると、「是」の後ろの述語部に隠れている要素を還元させれば「是」前後の成分の「同一関係」が成立する。つまり、文に隠れている要素が最も重要な要素であるため、「是VO的」文の叙述の焦点は「主語」であり、「是V的O」文の叙述の焦点は「主語が行った動作」であるというふうに考えられる。換言すれば、例(3') の「是」の後ろのすべての成分が主語「他」を囲んで働いている。一方、例(4') の「是」の後ろのすべての成分が主語「他」が行った動作を囲んで働いている。ここまでは、牧野(1996)における<Nは～的>が述部による主語の特徴づけを表し、「是～的」が動作に関する状況に最大の際だちを与えるという観点に一致する。

## 2. 「叙述の焦点」の視点から

### 2.1 先行研究

袁毓林(2003a)において、「是～的」構文は「狭焦点」, 「広焦点」を表すことができるとする。袁氏はまず「狭焦点」と「広焦点」について次のように述べている(袁毓林2003a: 5-6)。

从语义表达功能上看, 把S<sub>10</sub>: “S+A+V+O”转换为S<sub>20</sub>: “S+Ad+V+O+的”的语义动因是: 改变事件句<sup>7)</sup> S<sub>10</sub>原有的焦点结构, 形成事态句 S<sub>20</sub>特有的焦点结构。

一般地说, 在事件句S<sub>10</sub>中, 常规的(regular)焦点是宾语O或状语性成分Ad; 当把S<sub>10</sub>转换为

S<sub>20</sub>以后，在事态句S<sub>20</sub>中，焦点可以是主语S，也可以是状语Ad。…（中略）…

…（中略）…显然，S<sub>20</sub>是隐式的（implicit）有标记的焦点结构，在焦点成分上必须有重音，即以焦点重读（focal stress）作为焦点标记；而S<sub>21</sub>和S<sub>22</sub>则是显式的（explicit）有标记的焦点结构，由于用了“是”这种词汇手段作为焦点标记，因而焦点成分可以不重读。…（中略）…这种事件句的事态化的语义后果，可以叫作宾语的去焦点化（defocusation）。…（中略）…由于这种焦点总是句法结构中的某个成分，因而可以称为窄焦点（narrow focus）。事实上，“（是）……的”结构有时还可以用来标记广焦点（broad focus），即以整个处于“（是）……的”结构中的事件句为焦点。…（中略）…由于“（是）……的”结构中的整个陈述全是新信息，因而它们是一种“句子焦点”句（sentence focus sentences）。

【狭焦点：語義の伝達機能上からみると，S<sub>10</sub>：“S+Ad+V+O”をS<sub>20</sub>：“S+Ad+V+O+的”に転換させる語義的な動因は，事件文S<sub>10</sub>本来の焦点構造を変化させ，事態文S<sub>20</sub>特有の焦点構造を形成させることである。

一般的に，事件文S<sub>10</sub>において，通常の（regular）焦点は目的語Oまたは連用修飾語Adである；S<sub>10</sub>をS<sub>20</sub>に転換させた後は，事態文S<sub>20</sub>における焦点は主語Sまたは連用修飾語Adとなる。…（中略）…

…（中略）…明らかにS<sub>20</sub>は暗示的な（implicit）有標の焦点構造であり，焦点成分には必ずストレスが置かれる，即ち焦点重読（focal stress）である；S<sub>21</sub>（筆者注：「是+S+Ad+V+O+的」を指す）とS<sub>22</sub>（筆者注：「S+是+Ad+V+O+的」を指す）は明示的な（explicit）有標の焦点構造であり，「是」という語彙手段によって焦点標識とするため，ストレスを必要としない。…（中略）…このような事件文を事態化させる語義的な結果は，目的語の非焦点化（defocusation）と呼ばれる。…（中略）…焦点は常に文構造中のある

成分であるため，狭焦点（narrow focus）とも呼ばれる。実際のところ，“（是）……的”構文は時には広焦点（broad focus）を示すのにも用いられる，即ち“（是）……的”構文の中の事件文全体を焦点とする。…（中略）…“（是）……的”構文におけるすべての陳述は新情報であるため，これは「文焦点」（sentence focus sentences）だと考えられる。

続けて袁（2003a：6）は，“的”の前移による焦点範囲の変化について，以下のように述べる。

在事态句S<sub>2</sub>“（是）S+（是）Ad+V+O+的”中，一方面是焦点落在“（是）……的”结构所圈定的范围之内，另一方面是宾语O经历了去焦点化的过程；这两种语义效应（semantic effects）叠加在一起，产生的一个自然的句法后果就是，“的”字可以前移到宾语O之前，从而造成了S<sub>30</sub>“S+Ad+V+的+O”这种句式。……

为了显性地，无歧义地标示出事态句S<sub>30</sub>中的焦点，最简单的办法是在S<sub>30</sub>中的焦点之前插入“是”作为焦点标记；于是形成了S<sub>31</sub>“是+S+Ad+V+的+O”和S<sub>32</sub>“S+是+Ad+V+的+O”这两种格式。…（中略）…为了概括起见，S<sub>30</sub>，S<sub>31</sub>，S<sub>32</sub>这三种句式可以合记作S<sub>3</sub>：“（是）S+（是）Ad+V+的+O”。显然地，“的”字的前移起到了缩小焦点范围（focus scope）的作用，它用一种显式的标志把被事态句解除焦点地位的宾语O隔离在“（是）……的”结构所标定的焦点范围之外。

在S<sub>2</sub>“（是）S+（是）Ad+V+O+的”中，宾语O已经被去焦点化了；在S<sub>3</sub>：“（是）S+（是）Ad+V+的+O”中，这种非焦点的宾语O又被显式地逐出了由“（是）……的”结构所标志的焦点范围。

【事態文S<sub>2</sub>：“（是）S+（是）Ad+V+O+的”において，焦点は“（是）……的”構造の範囲内にあり，目的語Oは非焦点化のプロセスを経ている。この二つの語義的な効果（semantic effects）が重なって生まれる自然な文法的結

果は, “的” が目的語であるOの前に移動することであり, そのためS<sub>30</sub>: “S+Ad+V+的+O” という文型が作られる。… (中略) …

明示的に, 多義性がないように事態句S<sub>30</sub>の焦点を示すための最も簡単な方法は, S<sub>30</sub>の前に焦点の標識である“是”を挿入して焦点の標識とすることである。そうすると, S<sub>31</sub> “是+S+Ad+V+的+O” とS<sub>32</sub> “S+是+Ad+V+的+O” の二つの形式が形成される。… (中略) … 概括するために, S<sub>30</sub>, S<sub>31</sub>, S<sub>32</sub>の三つの文型を合わせてS<sub>3</sub>: “(是) S+ (是) Ad+V+的+O” と表記する。明らかに“的”の前移は焦点範囲 (focus scope) を縮小する働きをしている。被事態文の焦点を解除された目的語Oはこのような明示的な標識によって“(是)……的”構造が表示する範囲内の外に隔離される。

S<sub>2</sub>: “(是) S+ (是) Ad+V+O+的” 文では, 目的語Oはすでに非焦点化されている; S<sub>3</sub>: “(是) S+ (是) Ad+V+的+O” では, 非焦点化された目的語Oは“(是)……的”構造が表示する焦点範囲からはっきりと追い出されている。

以下は, 袁 (2003a) の「狭焦点」と「広焦点」の定義に基づき, 「対象」, 「手段」, 「場所」, 「時間」などの要素に加えて, “是VO的” と “是V的O” の叙述の焦点を分析する。

## 2.2 考察

“是～的”構文は文脈への依存度が高い構文であるため, “是～的”構文における叙述の焦点は, 文に必ず必要な必須格以外の時間, 場所, 道具などの要素に影響される。以下では, まず, 最も基本的な“是VO的”と“是V的O”形式の例文を答えとする否定文を作ってみる。その否定された内容により, 文の焦点を判断する。そして, “是+Ad+VO的”と“是+Ad+V的O”形式を「手段」, 「場所」, 「時間」などの要素を考慮しながら, 否定された文要素の位置の変化につれて叙述の焦点がどのように変わっていくのかを考察してみる。

### 2.2.1 連用修飾がない場合

(5) ①他是 (来) 买戒指的。

a. 他 是 (来) 买 戒指 的,  
彼 (～しに来る) 買う 指輪  
不 是 (来) 买  
(～しに来る) 買う～  
项链 的。

ネックレス

(彼は指輪を買いに来たのだ, ネックレスを買いに来たのではない。)

b. 他 是 (来) 买 戒指 的,  
彼 (～しに来る) 買う 指輪  
不 是 (来) 偷  
(～しに来る) 盗む～  
戒指 的。

指輪

(彼は指輪を買いに来たのだ, 指輪を盗みに来たのではない。)

c. 他 是 (来) 买 戒指 的,  
彼 (～しに来る) 買う 指輪  
不 是 (来) 看 电影的。  
(～しに来る) 見る～ 映画

(彼は指輪を買いに来たのだ, 映画を見るために来たのではない。)

いずれの文も目的を表すマーク「来」(来る)は必須ではないが, 「来」を加えたほうがより自然な文である。何故ならば, 「来」を加えないと, 「他是买戒指的 (人)」(彼は指輪を買いに来た人だ。) という意味に取られる可能性があり, 事態を表す例文しか扱わないという本研究の原則から外れてしまうためである。例文 a. ～例文 c. の順に否定文を作っていくと, 「目的語」, 「動詞」, 「動詞フレーズ」が否定されていることが分かる。つまり, 例文(5) ① の叙述の焦点は, (5) ① a., b. のような「目的語」や「動詞」であり, (5) ① c. のような「陳述全体」でもある。従って, 「場所」や「時間」などを表す連用修飾がない場合, “是VO的” 文の叙述の焦点は「狭焦点」と「広焦点」の両方を兼ね備えると考えられる。

(5) ②他是买的戒指。

a. 他是买的戒指, 不是买的项链。

(彼は指輪を買ったのであり, ネックレスを買ったのではない。)

b. 他是买的戒指, 不是偷的戒指。

(彼は指輪を買ったのであり, 指輪を盗んだのではない。)

例文(5) ②を否定文にすると, 目的語である「戒指」を否定する例文a. と述語である「买」を否定する例文b.ができる。つまり, 例文(5) ②の叙述の焦点は文の成分である「目的語」か「動詞」であり, 袁(2003)が指摘した「狭焦点」であると考えられる。

以上二つのグループの例文のように, “是VO的”文の焦点は「目的語」や「動詞」の場合, 叙述の焦点は「狭焦点」であり; 「陳述全体」の場合, 叙述の焦点は「広焦点」であるといえる。一方, “是V的O”文の焦点は「目的語」と「動詞」であるため, 叙述の焦点は「狭焦点」であるといえる。また, “是VO的”文と“是V的O”文を比較すると, “是VO的”文は「陳述全体」にも焦点を当てするため, 動作主について陳述する特徴があるといえる。

## 2.2.2 連用修飾がある場合

「手段」, 「場所」, 「時間」などの連用修飾を付け加えた場合, “是～的”構文の叙述の焦点はどのように変化していくのかを焦点の標識である“是”で検証してみる。

まず, “是VO的”文について分析を加える。

- (6) ①他 是 去年 在 北京 用 現金  
彼 去年 で 北京 で 現金  
买 戒指 的。  
買う 指輪

(彼は去年北京で現金で指輪を買ったのだ。)

方法としては, 例文(6) ①は動作主, 連用修飾語, 目的語を焦点化していると仮定し, “是”の位

置を変えることでこの仮定を検証する。以下では, 焦点の位置をアンダーラインで示す。

- a 是他去年在北京用現金买戒指的。  
b 他去年是在北京用現金买戒指的。  
c 他去年在北京是用現金买戒指的。  
d \*他去年在北京用現金是买戒指的。  
e \*他去年在北京用現金买是戒指的。

まず, 例文(6) ① a. ~ c. の焦点を「動作主-他」, 「連用修飾語-在北京/用現金」に当ててみる。そうすると, 例文(6) ① a. ~ c. は“是”の場所によって焦点変わるが, “是VO的”文であること自体は変わらない。そして, 「動詞フレーズ-买戒指的」に焦点を当ててみる。例文d. の場合は, “是”を挿入すると, 例文d. よりむしろ「他去年在北京用現金是买的戒指。」のほうが自然である。例文d. は過去の出来事を表すのに, 已然義を担う“的”と動詞が直接結合した形式“V-的-No<sup>8)</sup>”の方が, 間に目的語を介した形式“V-No-的”に比べずっと適した形式である。<sup>9)10)</sup> また, 例文d. と同じく, 「目的語」に焦点を当てた例文e. は, 「他去年在北京用現金买的是戒指。」のほうが自然であるが, “是”字句になるため, 分析対象にならない。

次に“是V的O”文に対して分析を加える。

- (6) ②他 是 去年 在 北京 用 現金  
彼 去年 で 北京 で 現金  
买 的 戒指。  
買う 指輪

例文(6) ②も動作主, 連用修飾語, 目的語を焦点化していると仮定し, “是”の位置を変えることで何が焦点になるかを検証する。以下では, 焦点の位置をアンダーラインで示す。

- a 是他去年在北京用現金买的戒指。  
b 他去年是在北京用現金买的戒指。  
c 他去年在北京是用現金买的戒指。

d 他去年在北京用現金是买的戒指。

e 他去年在北京用現金买的是戒指。

例文(6) ② a. ～ d. の焦点を「動作主－他」, 「連用修飾語－在北京/用現金」, 「動詞フレーズ－买的戒指」に当ててみると, 例文(6) ② a. ～ d. は“是”の場所によって焦点変わるが, “是V的O”文であること自体は変わらない。一方, 「目的語」に焦点を当てる例文 e は, “是”字句になるため, 検証の対象から外す。

以上二つのグループの例文のように, “是VO的”文の焦点は「動作主」, 「連用修飾語」であるのに対して, “是V的O”文の焦点は「動作主」, 「連用修飾語」, 「動詞フレーズ」であることから, “是V的O”文のほうがさらに「狭焦点」であると見られる。また, “是V的O”文と“是VO的”文を比較すると, “是V的O”文は「動詞フレーズ」にも焦点を当てるため, 動作主が行われた動作について陳述する特徴があるといえる。

以上, 袁毓林 (2003a) で述べられた「狭焦点」と「広焦点」の観点をを用いて, “是VO的”と“是V的O”の叙述の焦点を検証してみた。まず, 連用修飾がない文を否定形式で検証した結果をみると, “是VO的”文の焦点は「目的語」や「動詞」の場合, 「狭焦点」であり; 「陳述全体」の場合, 「広焦点」であると見られる。一方, “是V的O”文の焦点は「目的語」と「動詞」であるため, 叙述の焦点は「狭焦点」であると見られる。つまり, 連用修飾が無い場合, “是VO的”文と“是V的O”文の違いは, 「陳述全体」に焦点を当てるか当てないかである。即ち, “是VO的”文の焦点は「陳述全体」に当てるため, “是VO的”文の焦点は, 文の述語部であり, 動作主について陳述する特徴があると言える。次に, 連用修飾がある文を焦点の標識である“是”を用いて検証してみると, “是VO的”文の焦点は「動作主」, 「連用修飾語」であるのに対して, “是V的O”文の焦点は「動作主」, 「連用修飾語」, 「動詞フレーズ」であることから, “是V的O”文のほうがより「狭焦点」であると見られる。つまり, 連用修飾がある場合, “是VO

的”文と“是V的O”文の違いは, 「動詞フレーズ」に焦点を当てるか当てないかである。即ち, “是V的O”文の焦点は「動詞フレーズ」に当てるため, “是V的O”文の焦点は, 動詞フレーズであり, 動作主が行われた動作行為について陳述する特徴があると言える。以上叙述の焦点で検証した両構文も, 牧野 (1996) における<N是～的>が述部による主語の特徴づけを表し, “是～的”が動作に関する状況に最大の際だちを与えるという観点到一致する。

### 3. おわりに

本稿は, 「主語と述語の意味関係」と「叙述の焦点」という二つの視点から“是～的”構文における“是VO的”文と“是V的O”文を考察した。その結果, “是VO的”文は主に「主語部」の動作主について語る陳述文であり, “是V的O”文は主に「述語部」の出来事について語る陳述文であると考えられる。この点については, 牧野 (1996) における<N是～的>が述部による主語の特徴づけを表し, “是～的”が動作に関する状況に最大の際だちを与えるという観点到一致する。

そして, 「叙述の焦点」の視点から, 否定形式や焦点の標識である“是”を用いて“是VO的”文と“是V的O”文の叙述の焦点を検証してみた。連用修飾がない場合, “是VO的”文と“是V的O”文の違いは, 「陳述全体」に焦点を当てるか当てないかである。即ち, “是VO的”文の焦点は「陳述全体」に当てるため, 動作主について陳述する特徴があると言える。一方, 連用修飾がある場合, “是VO的”文と“是V的O”文の違いは, 「動詞フレーズ」に焦点を当てるか当てないかである。即ち, “是V的O”文の焦点は「動詞フレーズ」に当てるため, “是V的O”文は動作主が行われた動作行為について陳述する特徴があると言える。以上の点についても, 牧野 (1996) における<N是～的>が述部による主語の特徴づけを表し, “是～的”が動作に関する状況に最大の際だちを与えるという観点到一致する。



今後は、“是VO的”文と“是V的O”文において、主語である「S」と「VO的」「V的O」との位置関係が文全体の意味変化にどのように影響するか、また「V」と「O」はそれぞれどのような役割があるのかを課題としたい。

## 【注】

- 1) 杉村 (1983: 478) で詳説。
- 2) 杉村 (1983) によると、「動詞が『的』と直接結合時、已然の事態を表すと読まれる」という。詳細は杉村 (1983) 参照のこと。
- 3) 牧野 (1996: 33) 参照。
- 4) 牧野 (1996: 41-42) で詳説。
- 5) 牧野 (1996: 36-41) で詳説。
- 6) この点に関し、杉村 (1983: 481) では、「『(…V-No [已然]) 的』という意味が『(…V-的-No)』という形式によって表されているのである」と述べる。また、杉村 (1995: 7) では、「一般的に、名詞句化助詞“的”と動詞が直接結合した形式〈…動詞-“的”-目的語〉は過去の事件を述べた形式として理解される傾向が強く、“的”との間に目的語を介在させた形式〈…動詞-目的語-“的”〉と、しばしば‘過去/個別’対‘非過去/一般’というテンス・アスペクト的な対立を構成する。」と述べる。一方、三宅 (1989: 54) では、次のように述べる。「‘V的’は、時を限定する状語や、文脈・場面の限定がない場合、已然・個別的な意味が優先される。即ち、動詞‘V’の表す動作・行為が、既に現実として具体的に行われていることを表しているのである。但し注意すべきことは、ここで述べていることは、‘V的’は已然・個別的な事象を表す場合が多いといった全体的傾向を指しているということである。‘V的’という言語形式が已然のアスペクトしか表し得ないというような強制的な規則ではない。…」。
- 7) 袁 (2003a) によると、事件文 (event sentences) とは「S+Ad+V+O」のような動詞フレーズを述語とする文である。事態文 (state-of-affairs sentences) とは文末に「的」が付く文である。
- 8) 杉村 (1983) では、目的語の役割を果たしている

名詞のことをNoと記す。

- 9) 杉村 (1983: 480) で詳説。
- 10) そのため、例文 d は過去を表す時間名詞「去年」を省略しても、過去の事態を表すことができる。これに対して、例文 d を将来の事態を表すには、「要」、「想」、「打算」などの助動詞を加える必要がある。

## 【主要参考文献】

- 杉村博文 「“的”前移せよ」『中国語学・文学論集』東方書店, 1983, pp.465-484
- 「中国語における動詞の承前形式」『語学大会研究論集3』大東文化大学語学教育研究所, 1995, pp.51-66
- 牧野美奈子 「“是～的”の意味と形」『人文学報』No.273 京都立大学人文学部, 1996, pp.33-46
- 三宅登之 「“V的”と“了”——“的”構造における“了”の生起に関して——」『中国語文』No.236, 1989, pp.53-69
- 袁毓林 「从焦点理论看句尾“的”的句法语义功能」『中国語文』No.292, 2003a, pp.3-16
- 「句子的焦点结构及其对语义解释的影响」『当代语言学』第5卷 第4期, 2003b, pp.323-338